

決
定

第14回

「国際開発研究 大来賞」

主催：財団法人 国際開発高等教育機構 (FASID)

「国際開発研究 大来賞」は、多様化する国際開発のニーズに対応し新たな指針を提示する研究を奨励するため、当財団の初代評議員会会長を務められた元外務大臣 大来佐武郎氏を記念して、平成9年に創設されました。

第14回の受賞作品が下記の通り決定いたしましたのでご紹介します。



田辺 明生 著

『カーストと平等性 —インド社会の歴史人類学—』

(東京大学出版会) 2010年

これまでの受賞作品

- 第1回 廣瀬昌平・若月利之編著『西アフリカ・サバンナの生態環境の修復と農村の再生』農林統計協会 1997年
原 洋之介著『開発経済論』岩波書店 1996年
- 第2回 絵所秀紀著『開発の政治経済学』日本評論社 1997年
深川由起子著『韓国・先進国経済論—成熟過程のミクロ分析—』日本経済新聞社 1997年
- 第3回 中兼和津次著『中国経済発展論』有斐閣 1999年
辻村英之著『南部アフリカの農村協同組合—構造調整政策下における役割と育成—』日本経済評論社 1999年
- 第4回 峯 陽一著『現代アフリカと開発経済学 市場経済の荒波のなかで』日本評論社 1999年
- 第5回 黒崎 卓著『開発のミクロ経済学』岩波書店 2001年
西川 潤著『人間のための経済学—開発と貧困を考える』岩波書店 2001年
- 第6回 石井正子著『女性が語るフィリピンのムスリム社会』明石書店 2002年
脇村孝平著『飢饉・疫病・植民地統治—開発の中の英領インド』名古屋大学出版会 2002年
- 第7回 平野克己著『図説アフリカ経済』日本評論社 2002年
- 第8回 石井菜穂子著『長期経済発展の実証分析』日本経済新聞社 2003年
安原 毅著『メキシコ経済の金融不安定性』新評論 2003年
- 第9回 藤田幸一著『バングラデシュ農村開発のなかの階層変動：貧困削減のための基礎研究』京都大学学術出版会 2005年
- 第10回 谷 正和著『村の暮らしと砒素汚染—バングラデシュの農村から』九州大学出版会 2005年
- 第11回 湖中真哉著『牧畜二重経済の人類学—ケニア・サンブルの民族誌的研究』世界思想社 2006年
- 第12回 牧田りえ著『Livelihood Diversification and Landlessness in Rural Bangladesh』The University Press Limited 2007年
- 第13回 武内進一著『現代アフリカの紛争と国家—ポストコロニアル家産制国家とルワンダ・ジェノサイド』明石書店 2009年

田辺 明生 著

『カーストと平等性 —インド社会の歴史人類学—』

(東京大学出版会)

審査委員選評

本書は、カースト制度について論じているが、カーストがヒエラルキーであり、権力による支配の構造であるという通常の理解に対して、カーストがそのようなものであるのは、政治・経済の側面での話であり、そのような構図の影に隠れた日常生活のレベル、とくに祭祀など宗教的、精神的次元では「存在の平等性」という原理が働いている、と指摘する。それは、すべての存在（人間）の根源的な平等性と、現実の世界でのカーストにもとづく支配や差別との間にある矛盾を「媒介」する原理であり、それは植民地時代の以前から、祭の場などで観察できるものとして存在してきた。インド社会における民衆の政治参加は、地域社会の中の派閥を通じる国家資源の獲得競争（賄賂や横領）という否定的な側面を含むが、それを乗り越える社会協力のための「文化的資源」として、この「存在の平等性」に期待できるという。1990年代の民衆主導の反差別、反カーストの動きにもそれは窺われる。このような本書の主張は、楽観的かもしれないが、一つの見方であろう。

著者は、カースト制度の変遷をインドのオリッサ地方で追いかねながら、同時に地域社会や日常生活の中での「存在の平等性」という原理の生き残りを確かめていく。この作業は大変な労力を伴うものであったと思われる。多くの聞き取り調査、フィールド調査、貝葉文書の収集、祭祀における儀礼、とくに生贊のお供えの克明な観察など、長期の実地調査が行われている。また、膨大な文献の読み込みが行われている。審査会は、これまでも地道な現場での研究を評価しており、今回も同様な観点から本書を推す声が多かった。なお、カースト制度に平等性をもたらす側面があるという歴史学の中の一派との違いが不明である、という指摘もあったが、インドに昔から「存在の平等」という観念があったことを気づかせてくれることを評価するという意見もあり、全体として本書を選ぶことで意見の一一致をみた。

本書は、A. Senや、Rawlsなどの議論も吸収しており、開発経済学にもつながる業績であると思われる。ただ、審査員の多くが経済学の畠の者であったために、本書の内容を十分に理解するのは容易ではなかった。もし、本書が簡潔で平易な文体で書かれていたら、他の候補作を大きく引き離す評価を得ていたと思う。他の候補作では、高橋基樹氏の『開発と国家：アフリカ政治経済論序説』を力作として推す声も多かったが、力が入るあまり、議論の展開が若干急になっていた部分があったのは惜しまれる。また、平野克己氏の『アフリカ問題：開発と援助の世界史』を推す声もあったが、氏の既受賞作との重複感があることから見送られた。

(政策研究大学院大学 名誉教授 大来 洋一)

第14回応募作品の傾向と選考経緯

2009年4月から2010年3月までに出版された開発援助を含む国際開発の分野における課題を主たるテーマとした日本人が執筆した日本語及び英語の研究図書を対象として公募したところ、31件の応募があった。

本年度の応募作品の特徴としては、地域研究が12に上り、内、6件がアフリカに関連するものであった。その他の応募作品については、経済・産業に重点が置かれている作品が6件、環境関連が4件、政治・法律関係3件、開発学全般3件、その他のジャーナリズムなどが5件であった。

当財団内部で予備審査を行った結果、受賞作品に加え、下記3件が最終審査に残った。

市川 昌広・生方 史数・内藤 大輔 編著

『熱帯アジアの人々と森林管理制度—現場からのガバナンス論』
人文書院

高橋 基樹 著

『開発と国家：アフリカ政治経済論序説』 効草書房

平野 克己 著

『アフリカ問題：開発と援助の世界史』 日本評論社

最終審査で審査委員から出された意見は、おおよそ以下のとおりである。

市川昌広、生方史数、内藤大輔氏の作品は、各国ごとの森林開発の実情についてフィールドに密着した有益な情報を大成しており、住民がどのような影響を受けてきたかが詳細に分析されているため、実践上大いに参考になると思われる。反面、いわば各現場の多様な現実を提示するに止まっている点が少々おしい。高橋基樹氏の作品について、

開発は欧米の論理が中心だったが、本作品では途上国の視点の重要性を説き、サブサハラ・アフリカ諸国の、歴史、民族、言語・文化、コミュニティー、人間性、行動原理まで分析している。今後必要な点として“対話”的重要性を説き、対話を通じアフリカの主体性を引き出し、ドナー主体の援助から脱却することの重要性を説いている点が興味深い。平野克己氏の作品は、援助の歴史を概観する上では、非常に分かりやすく描かれ、援助物語を読むようで興味深く、広く普及することが期待される。

田辺明生氏の作品は、近代インドの歴史学が地位と権力を軸として社会の発展や構造変化をとらえてきたことに対し、インド史に通底するもう一つの原理、「存在の平等性」という現在インド社会を律する原理を掘り起こしている。題材が難しいために難解な部分もあるが、本書に掲載されている情報は深く、貴重なものである。インドの一地域での情報収集、長時間にわたるフィールドワークの未描かれた作品として、その労力を敬したい。

受賞者の言葉

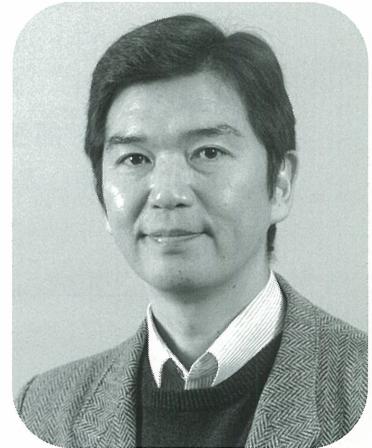
このたびは栄える賞をいただきまして、ほんとうにありがとうございます。選考委員の先生方、これまで指導してくださった諸先生方、本書の出版にあたってお世話になった皆様、そして本書の主人公であり私のフィールドワークにおつきあいくださったインドのたくさんの皆様方に、心からお礼を申し上げます。

今回の受賞は思いがけないものでした。私は法学部を出てから、大学院で文化人類学を専攻しました。そのときは、いわば「開発する」側から「開発される」側のほうに自分の立ち位置を移したような、ちょっと悲壮なヒロイズムがありました。別の言葉でいえば、システムの側から人間の側にうつったような気でいたのです。若さゆえのごうまんと笑ってお許しください。だけどそんな私でしたから、自分が「国際開発研究」という名を冠する「大賞」をいただく榮誉を受けることになるとは、正直言ってやはり意外でした。受賞の連絡をお電話でいただいた後、しばらく感慨にふけり、自分も時代も学問も変わったのだな、とあらためて思わずるをえませんでした。

1990年代初頭にインドで最初のフィールドワークをしたときには、国家や市場のシステムと、地域社会に住む人々の生活世界は、たしかに大きく隔たっているようにみえました。しかしその後、そうした隔たりこそがポストコロニアルのシステムとしてできていたのだということに気付かされていました。現在ではポストコロニアルからグローバルへと世界が動くなかで、インドにおいても、人々の日常の暮らしは大きな政治経済の動きとより直接的に関わっています。また、人々はみずから生活をよりよいものにするべく、グローバルなつながりをふくむあらゆる領域で行為主体性を發揮するようになっています。これは、資本と統治の論理が社会のすみずみにいきわたると同時に、政治と経済のかたちが生活世界の関係性や価値に大きく影響を受けて変容していく過程でもあります。本書ではそうした動きの政治的な一側面を〈ヴァナキュラー・デモクラシー〉と名付けて論じました。世界もインドも大きく変わつており、本書ではそのほんの一部を論じられたにすぎません。

今回の受賞を励みに、地球的システムの歴史性をみる広い視野と、人間の生活世界の日常性をみるミクロな視点を両方大事にしながら、よりよい世界を考えるために研究なお一層いそしんでいきたいと思っています。ほんとうにありがとうございました。

(田辺 明生)



著者略歴

田辺明生 1964年岡山県生まれ。1988年東京大学法学部卒業、1993年東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程中退。東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手、京都大学人文科学研究所准教授などを経て、現在、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授、同研究科附属現代インド研究センター長。博士（学術）。

主要著書 『地球圏・生命圏・人間圏—持続的な生存基盤を求めて』（共編著、2010年、京都大学学術出版会）
『南アジア社会を学ぶ人のために』（共編著、2010年、世界思想社）

『The State in India: Past and Present』（共編著、2006年、Oxford University Press）

『Dislocating Nation-States: Globalization in Asia and Africa』

（共編著、2005年、Kyoto University Press and Trans Pacific Press）

『Gender and Modernity: Perspectives from Asia and the Pacific』

（共編著、2003年、Kyoto University Press and Trans Pacific Press）

表彰式および記念講演会

表彰式及び記念講演会

日 時 2010年12月2日(木) 午後3時～4時

場 所 財団法人 国際開発高等教育機構 1F セミナールーム1

参 加 費 無料

申し込み <https://form.fasid.or.jp/forms/form4/>
(オンライン申し込み)



審査委員会

●審査委員●

浅沼 信爾 (一橋大学 国際・公共政策大学院 客員教授)

荒木 光弥 (株式会社国際開発ジャーナル社 代表取締役)

大来 洋一 (政策研究大学院大学 名誉教授)

河野 善彦 (財団法人才イスカ 事務局上席顧問 兼 日本アマゾンアルミニウム(株) 常勤監査役)

廣野 良吉 (成蹊大学 名誉教授)

大塚 啓二郎 (政策研究大学院大学 教授 兼 プログラム・ディレクター)

湊 直信 (FASID 国際開発研究センター 所長代行)

●お問い合わせ先●



財団法人 国際開発高等教育機構 国際開発研究センター 担当:林

〒107-0052 東京都港区赤坂7-1-16 日本生命赤坂第二ビル2階

TEL : 03-6804-3504 FAX : 03-6804-3505 URL : <http://www.fasid.or.jp> E-mail:okita2010@fasid.or.jp